

南コーカサス新石器時代における土器の起源と乳利用—残存有機物分析の予備成果

下釜和也

ユーラシア大陸において動物の乳を利用して、乳製品に加工し摂食する文化がいつ、どこで始まったのか、これまで実証するのは困難であった。民族学的には西アジア型の発酵乳利用技術が起源となるという先行研究があるが、その成立年代や地域、技術の実態、拡散のメカニズムに関するデータが欠如していたためである。

従来の研究では、図像資料や土器形態からの類推によって乳利用の起源が西アジアでは前6千年紀後半に求められていた。また、動物考古学による屠殺年齢パターンの検討から家畜化が始まった先土器新石器時代に遡るとする仮説もあった。21世紀に入って、土器胎土中に残存する古代有機物（脂肪酸やタンパク質）を検出し、乳利用の証拠に直接迫る研究手法が開発され、古代ユーラシアの乳利用が続々と明らかとなっている。それらによれば、西アジアからヨーロッパ方面への乳加工技術の拡散は、農耕牧畜の拡散に伴って前7千年紀前半にまで遡ることが実証されている。

しかし、西アジア以東もしくは以北への拡散過程は依然不明である。発表者らは南コーカサス地域の新石器時代土器資料（前6千年紀前半）の残存脂質分析を通じて、同地域への農耕牧畜の導入と乳利用技術の伝播に相関があったかどうか検証すべく研究を継続中である。同地域では前6000年前後に肥沃な三日月地帯から農耕牧畜を受容したことが日本・アゼルバイジャン合同調査団によって明らかになった。土器製作の伝統が始まるのも家畜動物の導入と同時であった。そこで、農耕村落ギョイトベ遺跡から出土した土器片試料47点を対象に残存脂質分析

（直接メチル化脂質酸抽出分析法）を実施した。

その結果、全点中12点で脂質を検出した。検出されたのは予測された通り粗質の鉱物混和土器で、黒煤付着物が顕著であることから煮炊きでの利用が明白である。分析結果は、遺跡上層では非反芻動物の体脂肪の影響が強いのにに対し、下層では反芻動物の体脂肪が数点で検出され、土器内でそれらの動物の肉を入れて調理していたことが判明した。しかし、肝心の乳脂肪の痕跡は目下のところ確認されていない。動物骨の屠殺年齢パターンの傾向分析によれば、上層ではヤギの年齢が老獣主体に傾斜しているため、その乳を含む二次産物利用が推察されるものの、土器胎土の残存脂質としては明確な乳利用はみられないという結果となった。

以上の予備結果からみて、南コーカサス地域では、農耕牧畜の導入にも関わらず、少なくとも土器による乳利用は行われていなかったということが示唆される。土器以外の革袋など有機材質の容器を用いて乳加工を行った可能性も考え得るかもしれない。先行研究と同じ分析手法で検出されないのであれば、西アジアから西方への早い段階での乳利用の拡散（土器での乳加工・調理）に比べ、なぜ北方の南コーカサスが遅れたのか説明する必要があるだろう。今後さらに分析点数を増やし考察を進める予定である。

なお、本発表は2018～2019年度乳の学術連合「乳の社会文化」学術研究助成（代表：宮田佳樹）による成果の一部である。

（SHIMOGAMA Kazuya 古代オリエント博物館研究員）

横浜ユーラシア文化館 第8号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 8

2020年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館

〒231-0021 横浜市中区日本大通12

Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453

www.eurasia.city.yokohama.jp/

発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

印刷製本 朝日オフセット印刷株式会社

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures

12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan

Published by the Yokohama Historical Foundation

Printed in Japan by Asahi Offset printing Co., Ltd.

©Yokohama Museum of EurAsian Cultures 2019

ISSN 2187-7734